

令和3年度

# 事業活動報告書



公益財団法人 吉野川紀の川源流物語

# I. 法人の概要

(令和4年3月31日現在)

法人の名称	公益財団法人吉野川紀の川源流物語
設立年月日	平成14年4月1日 平成24年4月1日名称変更し、移行したことにより設立
定款に定める目的	この法人は、「樹と水と人の共生」を目指し、吉野川・紀の川の源流部を拠点に、その自然的価値、文化的価値を大切に、流域をはじめ都市部の人々にこれを伝え、共に考え、行動するため、体験学習・交流活動を通じて、広く啓発や環境教育に関する事業を行う。そして、これに必要な拠点施設や関連公共施設の維持管理・運営に関する事業を行い、源流域の自然環境保全活動に努める。これらの活動により、流域をはじめ都市部の人々と水源地域を結び、もってそれらの人々の公共利益に寄与することを目的とする。
定款に定める事業内容	この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。 (1) 環境学習・体験プログラムの提供にかかわる事業 ① 「吉野川源流－水源地の森」体験学習プログラムの提供 ② 森づくり体験学習プログラムの提供 ③ 体験学習を通じた環境教育の実施及び支援 ④ 水源地域の環境保全にかかわる人材の育成 (2) 流域交流・啓発にかかわる事業 ① 水源地域の自然及び文化を介した交流行事の実施 ② 水源地域の環境保全の普及啓発のための行事等の開催、印刷物等の刊行、電子情報媒体の作成 (3) 源流域の自然や歴史の調査・研究にかかわる事業 ① 水源地域及び流域における参加型観察調査会の実施 ② 「吉野川源流－水源地の森」自然実態調査の実施 ③ 源流部における斜面崩壊地での対策実験及び経過観察の実施 (4) 拠点公共施設の管理・運営にかかわる事業 ① 展示を通じて情報発信を行う施設の管理・運営 ② 源流部での体験活動の拠点となる森とこれに付随する施設の管理 (5) 学習教材や、啓発関連物品等の販売 (6) 他団体からの依頼にもとづいてこの法人が構築する情報や技術によって対応可能な業務の受託 (7) その他この法人の目的を達成するために必要な事業 2 前項第1号から第4号までの事業は、公益目的事業とし、奈良県内で行う。
主たる事務所	〒639-3553 奈良県吉野郡川上村大字迫 1374 番地の1

<p>役 員 等</p>	<p>評議員（五十音順）</p> <p>浦西 勉 （元龍谷大学教授）</p> <p>新井 寿彦 （川上村教育委員会次長）</p> <p>塩見 浩之 （奈良県水循環・森林・景観環境部長）</p> <p>末松 新一 （和歌山県企画部地域振興局地域政策課長）</p> <p>杉浦 淳 （大阪工業大学研究支援・社会連携センター長）</p> <p>杉本 晃一 （川上村住民課長）</p> <p>谷本 光司 （一般社団法人 近畿建設協会理事長）</p> <p>中村 嘉宏 （和歌山市企業局長）</p> <p>西野 浩行 （奈良県水道局長）</p> <p>東谷 八宗 （川上村議会議長）</p> <p>宮田 典和 （橋本市水道環境部長）</p> <p>理事（代表理事・業務執行理事を除き五十音順）</p> <p>栗山 忠昭 代表理事・理事長（川上村長）</p> <p>阪口 和久 代表理事・副理事長（川上村副村長）</p> <p>森脇 深 業務執行理事（川上村水源地課長）</p> <p>辻谷 達雄 （元 森と水の源流館館長）</p> <p>西久保 智美（コミュニティライター）</p> <p>橋本 裕行（明治大学文学部兼任講師 橿原考古学研究所特別研究員）</p> <p>宮口 侗迪（早稲田大学名誉教授）</p> <p>横田 岳人（龍谷大学 先端理工学部 環境生態工学課程准教授）</p> <p>芳川 一宏（奈良県水循環・森林・景観環境部 水資源政策課長）</p> <p>監事（五十音順）</p> <p>辰巳 八郎（川上村監査委員）</p> <p>中島 誠（税理士）</p>
<p>主 な 会 議</p>	<p>定例理事会 6月 8日（前年度事業報告及び決算の件 定時評議員会の招集の件ほか）</p> <p>定時評議員会 6月23日（評議員選任の件、理事選任の件 前年度事業報告及び計算書類等の承認）</p> <p>定例理事会 3月22日（次年度事業計画及び収支予算書の件ほか）</p>

## II. 事業の状況

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため計画していた事業を一部中止した。

また実施した場合でも参加人数を減らすなどの対策を行った。

公益事業Ⅰ		環境学習・体験プログラムの提供にかかわる事業			
吉野川・紀の川の源流及び水源地域の自然環境や文化を資源とした環境学習及び体験等のプログラム実施を通じて、環境保全や保護についてともに考え、行動するきっかけを提供する。そして流域をはじめ都市部の人々と水源地域の交流を促進し、これらの地域の環境に対する意識の向上ならびに環境保全に寄与する。					
	時期	回数	参加数等	概要	
水源地の森ツアー(一般公募型)	4・11月	2回	22名	水源地の森での体験学習。感染症対策で定員を半数に減らし実施。	
団体(企業含む)研修等での利用	通年	8件	117名	「水源地の森」散策や森づくり体験等。	
源流学の森づくり特別編 ～吉野林業の今を学ぼう～	9月	1回	17名	当初実地学習の予定をオンラインで吉野林業の現状を山林所有者・林業家から話を聴き、意見交換を行う。	
環境教育支援(学校対応)	通年	101件	5,784名	小学校から大学までの見学案内及び出張源流教室(オンラインを含む)。	
森と水の源流館 ESD 授業づくりセミナー	6～2月	5回	123名	近畿 ESD コンソーシアムとの連携事業で教員のための授業計画づくり。オンラインをあわせて開催。	
源流学教室 ～源流学の教科書を作る～	6月	1回	19名	源流人会を対象に、川上村の魅力やその理由を共有し、まとめた。	
草刈りボランティアの機会づくり (川上村「未来への風景づくり」)	6月	1回	14名	旧白屋地区の草刈り・外来種の駆除を行い、水源地域の環境保全にかかわる人材を育成。	

公益事業Ⅱ		流域交流・啓発にかかわる事業			
吉野川・紀の川流域をはじめ都市部の人々と相互に交流することによって、源流及び水源地域の自然環境や文化的価値を見出し、大切に守り育てていくことを目的とした啓発イベントや講座を実施する。そして自然環境について高い意識をもった人材育成につなげることで、これらの地域環境保全ならびに向上に寄与する。					
	時期	回数	参加数等	概要	
夏休み(館内)プログラム	7～8月	9種	-	「木の端材アート」、「お散歩自然観察」等のほか、新しい試みとしてオンラインで標本づくりを指導する「オンライン昆虫標本づくり教室」を実施。	
水源地の森守募金	通年	-	-	寄せられた募金で環境保全啓発のためのチラシや看板を製作。	
流域等各地へのPRキャラバン	通年	3回	-	和歌山市「しらすまつり」、「近畿 ESD コンソーシアム実践報告会」等に参加。	
機関誌『ぼたり』発行	7・11・3月	3回	-	財団の動きや各事業報告・調査レポートなど。53号は森と水の源流館開館20周年記念号として編集。	

公益事業Ⅲ	源流域の自然や歴史の調査・研究にかかわる事業			
吉野川・紀の川流域の源流部における自然的価値及び文化的価値を大切にするため、流域をはじめ都市部の人々にも参加を求めながら調査・研究を行い、その成果の発信を行うことを通じて、これらの地域の環境保全ならびに向上に寄与する。				
	時期	回数	参加数等	概要
吉野川紀の川しらべ隊	7・10・3月	4回	66名	参加者公募型の調査。7月分は企画展開連行事として、3月分はオンラインで実施した。
旧白屋地区の定期観察と発信	4～11月	-	-	白屋地区の昆虫相のモニタリング調査と雑草堆肥づくりを実施。
水源地の森自然環境調査	9月	2回	8名	令和3年度は土壌生物を調査。
水源地の森下層植生調査	6・10月	4回	4名	下層植生の調査。
川上村内の自然環境調査	通年	-	-	鳥獣害被害、ギフチョウの生息状況の調査を実施した。特定外来生物指定植物について学術誌に発表。
他機関への調査協力	通年	-	-	昆虫(アルゼンチンアリ)の同定、希少野生動植物(コサナエ)調査協力 昆虫(ゴイシツバメシジミ)調査協力。

公益事業Ⅳ	拠点公共施設の管理・運営にかかわる事業			
水源地域における環境保全の啓発や環境教育を行う拠点となる施設やフィールドを一体的に維持管理及び運営を行うことで、地域環境保全ならびに向上に寄与する。				
	時期	回数	参加数等	概要
「森と水の源流館」管理	通年	-	利用者 9,576名	日常の維持・管理、運営、定期点検、清掃、補修。1～3月は展示改修工事のため臨時休館。
「吉野川源流－水源地の森」管理	通年	38回	-	散策路周辺の見回り・点検、補修。(入山者186名)
「水源地の森交流施設」管理	通年	16回	-	水源地の森に付帯する休憩・管理施設の見回り・点検、補修。

### ※森と水の源流館の新型コロナウイルス感染拡大防止対応

入館時のマスク着用・検温・手指消毒の徹底、団体受入れ時の貸切・入場制限、退出後の館内消毒などの対策を行った。また第5波といわれた夏休み明けの頃からの対応を川上村役場と協議し、9/12まで団体受入れと野外プログラムを中止するなどの対策を行った。

<b>収益事業Ⅰ</b>	<b>ミュージアムショップ事業</b>
拠点施設において、訪問の記念となる品とともに、源流及び水源地域の支援・PR並びに自然環境の保全・啓発等に寄与する関連商品の販売を行う。	
概要	
オリジナル商品(副読本・絵本・ポストカード・楽曲 CD など)、地域の自然・歴史・文化・伝承を紹介した商品(書籍・地図など)、村内で生産された商品(ペットボトル入湧水・雑貨品など)、自然観察用品(野帳・ルーペなど)を販売している。	

**※新型コロナウイルス感染拡大防止対応**

来館者が手にとれないように販売品の陳列はせず、POPの掲示のみとした。

<b>収益事業Ⅱ</b>	<b>受託事業</b>		
他団体からの依頼にもとづいて当財団が構築する情報や技術によって対応可能な業務を受託し、実施する。			
	委託者	時期	概要
和歌山市民の森管理業務委託	和歌山市	8/27～3/31	3haの二次林管理作業。
水のつながりプロジェクト実施等に係る業務	川上村	4/12～12/31	農作業や源流散策など平野部との相互交流事業実施支援、報告作成、10周年記念行事。
ESDの視点をいかした流域連携推進業務	川上村	1/25～3/28	当財団の「つながりのコツ」を共有することで、源流側のキーパーソンの育成。
東京海上日動(和歌山支店) 「Green Gift 地球元気プログラム」	日本NPOセンター	4/1～9/30	環境保護に関する体験活動に向け「川の恵み生き物観察動画」(上流編・中流編・下流編)を作製。
コサナエ保護管理事業計画策定に対する 指導、協力	環境科学大阪(株)	4/13～3/11	生息地の情報提供、保護管理に関するアドバイス、現地調査への同行。
啓発用間伐材割箸セット製作	森林環境保全促進和歌山市議会議員連盟	9/7～2/7	和歌山市立小学校54校に配布する間伐材割箸セットの製作を受託。

## 公益事業Ⅰ 環境学習・体験プログラムの提供にかかわる事業

一般公募や団体の要望により企画する「水源地の森ツアー」のほか、源流地域の自然や文化にふれる体験型ツアーを含めた研修の受け入れを行った。

### 【一般公募型 水源地の森ツアー】

4月・11月に開催で22名参加。県内コロナ感染増加状況に応じ、7月を3月に延期も中止。



### 【団体・企業の研修等での利用】



奈良ダイハツ株式会社 (4/9)



奈良県フォレスターアカデミー (11/6)

### 【源流人会の活動】

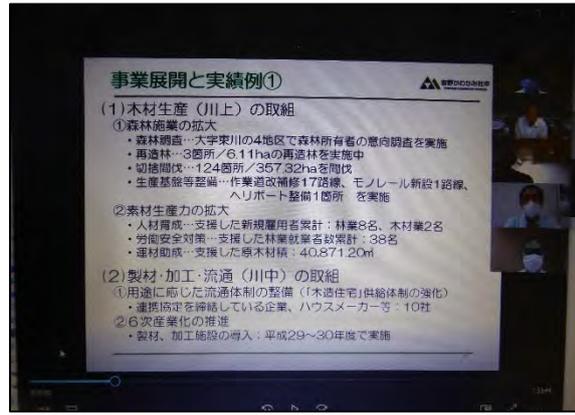
水源地域の環境保全にかかわる人材育成。山村で培われた知恵、技を「源流学」として共有。



「源流学教室～源流学の教科書を作る～」 (6/12)



「白屋草刈りボランティア」 (6/5)



「源流学の森づくり特別編～吉野林業の今を学ぼう～」(9/25)

新型コロナウイルスの感染拡大状況からオンラインにて実施。一般社団法人吉野かわかみ社中・谷林業株式会社・一般社団法人大和森林管理協会からの話題提供のあと、参加者も交えて意見交換を行った。

【環境教育支援(学校対応)】

コロナ禍ではあったが、新規を含めて、奈良県内の小学校利用件数が増加した。また、前年度に引き続き、オンラインを活用した授業支援の機会も増加傾向にある。



香芝市立関屋小学校 4年生 (5/18)



同志社国際学院初等部オンライン授業 (8/31)

【森と水の源流館 ESD 授業づくりセミナー(近畿 ESD コンソーシアム)】

小学校教員の学習指導案作成を奈良教育大学とともに支援する全 5 回の研究会。オンラインを併用し、県外からの参加も可能となり、川上村と同じユネスコエコパークに立地する長野県山ノ内町の小学校との交流授業も実現した。



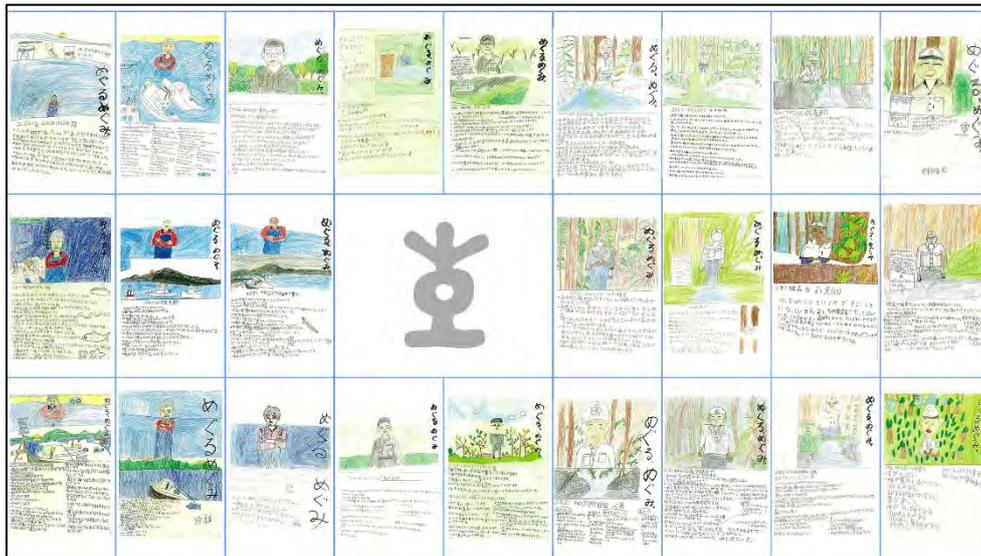
授業づくり実践報告会 (2/26)



特別編リニューアル内覧会 (3/29)

**【ESD の取組発信】**

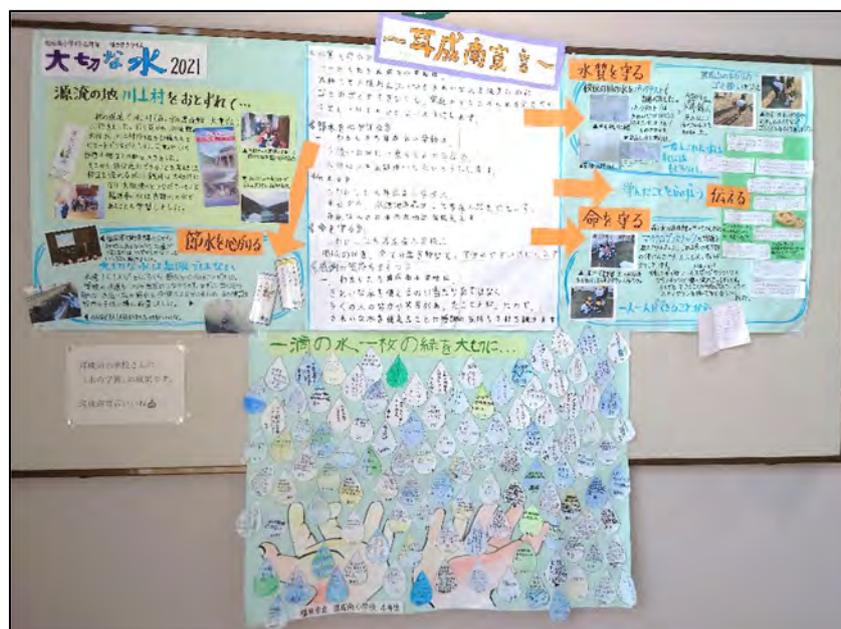
オンラインを活用しながら、森と水の源流館スタッフのほかにも多様なステイクホルダーがかかわり、取組んだ ESD の授業支援では、より深い学びの成果が届けられる。



**【檀原市立畝傍南小学校 4年生 水のめぐみ】**



**【奈良市立平城小学校 4年生 自分ごとで地域の川を考える学習】**



**【檀原市立耳成南小学校 4年生 自分たちもできることを「耳成南宣言」で表現】**

## 公益事業Ⅱ 流域交流・啓発にかかわる事業

コロナ禍において機会は少なくなったが、オンラインによる活動事例の発表や対面式のイベント出席等にも参加し、源流地域の魅力とともに、理念と活動について発信した。

### 【夏休み館内プログラム】

講師による工作体験プログラムに加え、ホームページ上で「観察カード」「いきものぬり絵」などを公開し、利用を呼びかけた。また新しい試みとしてオンラインにより指導を行う「オンライン昆虫標本づくり教室」も行った。



「木の端材アート」(8/23)



「オンライン昆虫標本づくり教室」(8/22)

### 【流域等各地での情報発信・PR、啓発活動】



「和歌浦しらすまつり」(11/3) ステージで『水の旅のはなし』『わりばしの歌』等で伝える



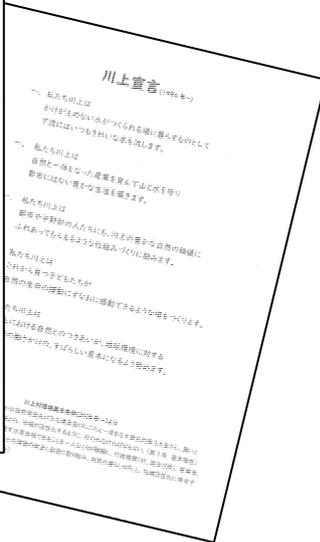
「近畿 ESD コンソーシアム実践報告・交流会」(12/25.26)



人づくり・地域づくりフォーラム in 山口  
オンライン (2/19)

## 【水源地の森守募金】

通年にわたって募金を呼びかけている。寄せられた募金は、環境保全啓発のためのチラシや看板の製作にあてた。

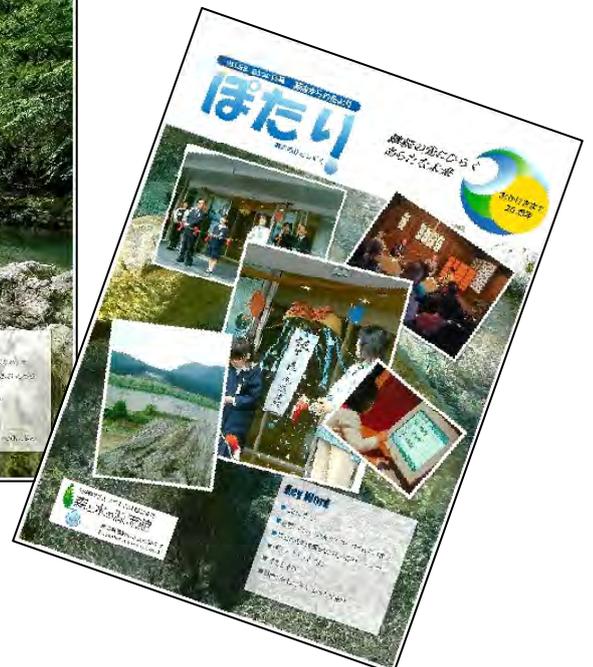
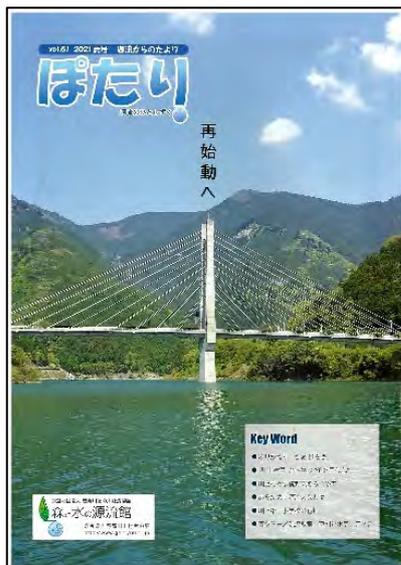


環境保全のための啓発チラシ、ターポリン幕(川上村西河に設置)

## 【機関誌『ぼたり』No.51・52・53号発刊】

活動報告や調査結果などを記載し、夏・冬・春の定期発刊。源流人会会員、村内観光施設、村内図書館、国会図書館ほかへ配布している。

53号は森と水の源流館開館20周年の記念号として、これまでの活動の振り返りや展示改修の内容を紹介し、20周年にあわせて、さらなる発信ツールとなるようにした。



## 公益事業Ⅲ 源流域の自然や歴史の調査・研究にかかわる事業

源流域の環境の実態把握と周知をねらいとして、流域をはじめ都市部の人々に協力を呼び掛けて参加型の調査も実施した。

### 【吉野川紀の川しらべ隊】

<b>「カマキリの種類と個体数をしらべよう」</b>	
<b>調査内容</b> 匠の聚(川上村東川)周辺の昆虫を調査	<b>実施期間、時期</b> 令和3年7月17日
<b>概要</b> 企画展「川上村の外来種」の関連行事として、参加者を公募し15名で実施。 企画展協力者であるムネアカハラビロカマキリの研究者を講師として招き、カマキリ目昆虫の調査を参加者とともに行った。	 「カマキリをしらべよう」実施風景

<b>「水生生物をしらべよう」</b>	
<b>調査内容</b> 蜻蛉の滝(川上村西河)周辺の水生生物を調査	<b>実施期間、時期</b> 令和3年7月31日
<b>概要</b> 参加者を公募し34名で実施。調査の結果、きれいな水(水質階級Ⅰ)の指標生物16種、ややきれいな水(水質階級Ⅱ)の指標生物7種、よごれた水(水質階級Ⅲ)の指標生物3種、とてもよごれた水(水質階級Ⅳ)の指標生物1種が確認された。生物指標からは昨年に引き続き音無川の水質が、きれいな水からややきれいな水に分類されることが確認できた。	 「水生生物をしらべよう」実施風景

<b>「蜻蛉の滝周辺のキノコをしらべよう」</b>	
<b>調査内容</b> 蜻蛉の滝(川上村西河)周辺の菌類を調査	<b>実施期間、時期</b> 令和3年10月2日
<b>概要</b> 参加者を公募し7名で実施。顕微鏡を使って細部を観察し、22種類の菌類が確認できた。 菌類か地衣類、どちらに属するか最近まで問題になり、現在は地衣類として扱われている希少なシラウオタケも発見した。	 シラウオタケ

<b>「蜻蛉の滝周辺のコケをしらべよう」</b>	
<b>調査内容</b> 蜻蛉の滝(川上村西河)周辺のコケを調査	<b>実施期間、時期</b> 令和4年3月5日
<b>概要</b> 新型コロナウイルス感染症対策のため、現地での調査は中止し、オンラインでの開催とした。10名の参加があった。 事前に記録・採集したコケ植物を紹介しながら、その特徴や生態を解説。生育する環境について講義を行った。	 ハマキゴケ(駐車場入口付近)

### 【水源地の森自然環境調査】

<b>吉野川源流-水源地の森の保全事業に関する環境調査</b>	
<b>調査内容</b> 平成14年度から毎年対象を設定し、「吉野川源流-水源地の森」を継続的に調査	<b>実施期間、時期</b> 令和3年4月～令和4年2月
<b>概要</b> 令和2年度調査で確認した貴重なサンショウウオ類のエサとなる土壌生物の調査を実施し、ミミズ類・ヤスデ類・ヒメフナムシ類のほか、冷温帯に生息するガロアムシ類、菌類相が豊かな森林に生息するオオキノコムシなどを確認した。土壌生物による「自然の豊かさ」診断では「豊か」にあたり、土壌生物からも「水源地の森」の環境が良好に保たれていることが示された。	 調査風景

<b>水源地の森下層植生調査</b>	
<b>調査内容</b> 「吉野川源流-水源地の森」内の下層植生を調査	<b>実施期間、時期</b> 令和3年6月～令和4年3月
<b>概要</b> 平成18年度より実施している調査。「水源地の森」内に設置した防鹿柵の内外で下層植生をモニタリングし、シカの食害による影響について調査した。柵内の植生は良好であり、ノウサギの食痕が多いものの植生破壊に繋がることはないと思われた。別に実施している川上村鳥獣害被害(ニホンジカ)調査と併せることで大型哺乳類による植生への影響の傾向をつかむようにしたい。また昨年度より記録されているナラ枯れ現象についても被害木の記録等に努めた。	 防鹿柵内外の植生の状態

### 【旧白屋地区定期・定点観察と発信】

<b>旧白屋地区調査</b>	
<b>調査内容</b> 過年度資料のモニタリング、各季節の調査レポートの作成	<b>実施期間、時期</b> 令和3年4月～令和4年3月
<b>概要</b> 過年度に引き続き昆虫相のモニタリングを実施するとともに、川上村地域おこし協力隊員とともに雑草堆肥づくりを実施した。旧白屋地区に自生するススキの刈り取り後の活用を目指したものであったが、堆肥化には思いのほか時間がかかること、集積場所、村民への還元方法などに課題が残った。	 <p>クモラン(着生ラン)を初確認</p>

### 【川上村内の自然環境調査】

<b>川上村における特定外来生物指定植物分布調査</b>	
<b>調査内容</b> 特定外来生物指定植物を学術誌に発表	<b>実施期間、時期</b> 令和3年12月
<b>概要</b> 川上村内で確認した特定外来生物指定植物ペラペラヨメナについて、「奈良植物研究」第41・42号に生育記録を発表した。	 <p>ペラペラヨメナ(大滝地区)</p>

<b>川上村鳥獣害被害(ニホンジカ)調査</b>	
<b>調査内容</b> 糞粒法によりニホンジカの生息密度を推定	<b>実施期間、時期</b> 令和3年11月～令和4年3月
<b>概要</b> 調査の結果、 「水源地の森」(天然林) 20.4～22.2 頭/1km <sup>2</sup> 林業体験の森(人工林・若齢林) 0.5～0.6 頭/1km <sup>2</sup> 高原村有林(人工林・高齢林) 約 4.1 頭/1km <sup>2</sup> 伯母谷区(集落周辺) 約 0.7 頭/1km <sup>2</sup> となり、 平均 7.2～7.8 頭/1km <sup>2</sup> 、村内で約 2,000 頭と推定した。ただし旧白屋地区(集落跡)を考慮に含めると、 村内での生息数は約 16,000～18,000 頭となる。	 <p>消失率を計測するためのサンプル糞 (林業体験の森での調査 2/4)</p>

<b>川上村におけるギフチョウ生息状況確認調査</b>	
<b>調査内容</b> 生息状況確認及び保護計画の立案	<b>実施期間、時期</b> 令和3年4月
<b>概要</b> 川上村が自然分布の南限であるギフチョウの生息状況確認調査を実施した。 食草の調査を実施した結果、個体数が多いものの株の矮小化が認められ、ギフチョウが利用可能な株が少なくなっていることが判明した。 調査活動については読売新聞に記事が掲載され、当該記事は読売新聞教育ネットワークの学習教材でも取り上げられた。	 <p>令和3年5月12日(読売新聞)</p>

**【他機関への調査協力】**

<b>奈良県 アルゼンチンアリの同定協力</b>	
<b>調査内容</b> 特定外来生物対策への協力	<b>実施期間、時期</b> 令和3年10月
<b>概要</b> 奈良県景観・自然環境課より県有施設で見つかった特定外来生物アルゼンチンアリの疑いがある昆虫について同定の依頼を受けた。 種検索の手法に準拠して当該生物であると同定し、結果と根拠を同定報告にまとめて提出した。	 <p>アルゼンチンアリ</p>

<b>環境省 ゴイツバメシジミ保護増殖事業</b>	
<b>調査内容</b> 保護・増殖事業モニタリング調査・啓発への協力	<b>実施期間、時期</b> 令和3年7月～8月
<b>概要</b> 環境省(近畿地方環境事務所)が北股で実施しているゴイツバメシジミ保護・増殖事業に関するモニタリング調査と啓発に協力。 情報交換会では自然観察会の実施等による人材育成が必要であると意見が出された。	 <p>調査風景</p>

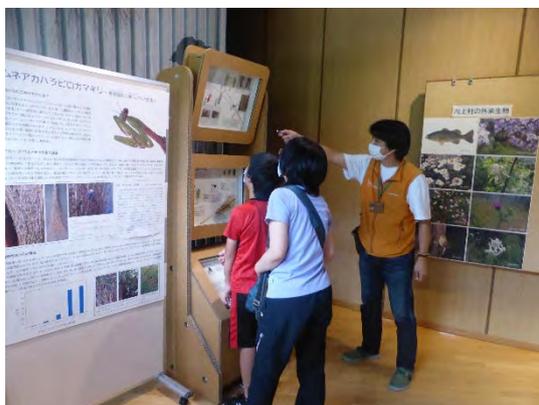
<b>奈良県 特定希少野生動植物コサナエ保護管理事業計画策定</b>	
<b>調査内容</b> 奈良県の自然環境行政に協力	<b>実施期間、時期</b> 令和3年4月～令和4年3月
<b>概要</b> 奈良県景観・自然環境課が進めている特定希少野生動植物のコサナエ(トンボ)の保護管理事業計画策定のための現地調査・文献紹介、生息環境保全にむけた提言等のアドバイザー協力を行い、令和4年3月に生息地及びその周辺地域の住民との地域連携による保全活動を展開することを目標とする保護管理事業計画の策定に至った。またコサナエは奈良県では下北山村の2カ所でしか確認されていない種であったが、奈良市で新たな生息地を発見した。	 <p>コサナエ</p>

## 公益事業Ⅳ 拠点公共施設の管理・運営にかかわる事業

### 【「森と水の源流館」の管理】

指定管理協定にもとづき年間の施設の維持管理・運営管理として、案内や企画展などを開催。

### 【企画展】



企画展「川上村の外来生物」(6/5～8/31)

展示品は出張教室等での利用を想定し製作、企画展終了後、一部は常設展示に移行した。関連行事として吉野川紀の川しらべ隊(7/17 公益事業Ⅲ)も開催した。

### 【展示改修に関する検討業務】

新型コロナウイルス感染拡大防止の視点を加えた展示コンセプトの整理、構成から原稿提出、グラフィックの検討、標本等の展示物の製作作業を行った。工事受託機関との定例会議への参加。工事休館期間には、水槽消毒・看板塗装などを直営作業で実施するとともに、リニューアルオープンと開館20周年に向けた準備を進めた。



原寸でのグラフィック確認



定例会議(上) 標本製作(下)



リニューアルされた内容を中心に館内と利用方法を案内する暫定パンフレットを作成。

利用シーンの写真を加えて、次年度以降に本格的なパンフレットを製作する予定。

**いざ、源流の森へ**  
 源流の森シアター  
 川上村が暮らす手付かずの天然体の森が広がる源流の森。コンサートやトークショーも開催できる素敵な空間です。  
 リアルに再現したジオラマには、巨木が立ち並ぶ中までさまざまな生きものが住んでいます。  
 トゲウサギ トキノネ

**ふしぎと出会う**  
 風のフィールド体験  
 「風」には「人が感じる魂」のような意味があります。森を使った人の暮らしによって守られている自然が感じられます。ここに暮らす生きものの魅力を紹介します。  
 森のフィールド体験  
 足跡やホネ、フン、菌にすむ菌類たちからのメッセージの受け取り方を伝えます。  
 森と水のライブラリー  
 ゆっくり読書もできるスペースで一休みしてください。  
 川のフィールド体験  
 道具にこめられた生活の知恵を探ってみよう!

**源流とつながる**  
 吉野川紀の川流域の生きもの  
 吉野川・紀の川の上・中・下流にどこを自然のつながりがあるか、どんな生き物がいるか詳しく紹介しています。  
 川をさかのぼりながらあなたに話しかけます。ふと足を止めて、驚いてほしい水のめぐみ、つながりのこと。  
 太古の森の暮らし  
 紀の平瀬川に遡って、丹生川上村と上村、後継地についてわかりやすく伝えています。

**川上村の歴史**  
 川上村に歴史が眠ったわけ、吉野川がもたらした村の歴史のつながりから見ていきます。  
 天明の裏にも新たな発見が

**人と水との共生をめざして**  
 私たちの暮らしに欠かせない水。自然の恵みはたまたまを信じ、おいしい水が生まれるしくみも自然の恵みです。

3F  
2F  
1F 駐車場 エントランス

### 「吉野川源流—水源の森」・「水源の森交流施設」の管理

「水源の森」及び休憩小屋・管理棟の定期的な見回り・点検・清掃・修繕を実施。

散策道の修繕、管理棟周辺でのゴミの回収なども行った。

近年、交流施設周辺でゴミの放置が増加している。川上村による監視カメラ設置にも立会った。



## 収益事業（受託事業）

### 【水のつながりプロジェクト実施等に関する業務】(川上村)

大和平野土地改良区と川上村が共催する、農作業の体験を通じた源流部と平野部の小学校の交流事業。10年目を迎えての記念行事の企画・実施にも協力した。



田植え体験(6/15)



稲刈り体験(10/18)



源流トレッキング(8/5)



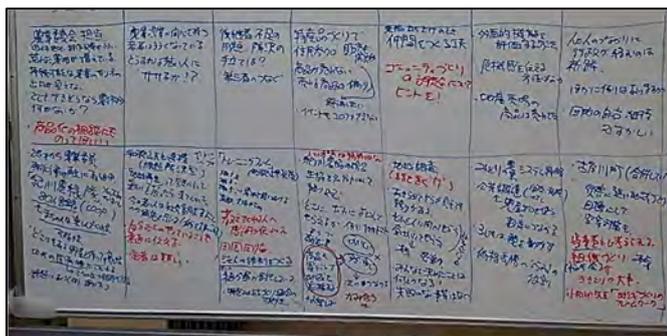
10周年記念式典「おかげ米贈呈式」(12/17)

### 【ESDの視点をいかした流域連携推進業務】(川上村)

川上村役場や公共施設職員を対象に、当財団において実践してきた流域を中心とする「つながり」の実例と流域キーパーソンを紹介し、共有することを目指した勉強会を開催。



「つながりを共有・活用するための勉強会」(3/17)



**【東京海上日動 Green Gift 地球元気プログラム】(日本 NPO センター)**

「川が結ぶ地域のつながり」を意識した紀の川大堰周辺の干潟の観察会を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大の傾向がみられたため、委託者の判断で観察会を断念。代替事業として環境体験動画ツール「川の恵み生き物観察」上流編・中流編・下流編の3本を作製した。



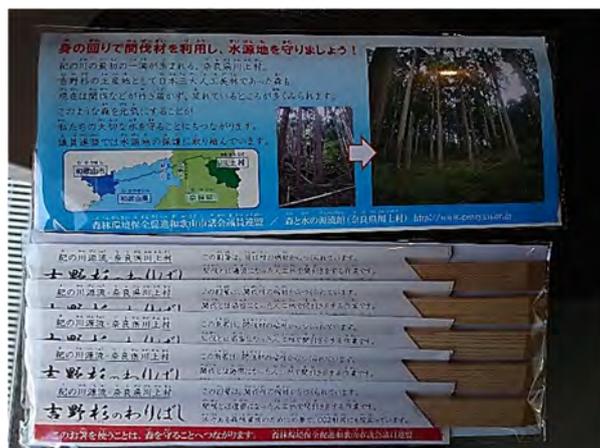
**【コサナエ保護管理事業計画策定に対する指導、協力】(環境科学大阪株式会社)**

生息地の情報提供、保護管理に関するアドバイス、現地調査への同行。



**【啓発用間伐材割箸セット製作】(森林環境保全会和歌山市議会議員連盟)**

これまで街頭啓発の機会でも配布していたが、コロナ禍のもと街頭配布の機会もないことから、和歌山市立の全小学校(54校)の児童全員に配布する目的で製作を受けた。このためあらたにルビを加えた。



パブリシティ（新聞ほか掲載記事）

絶滅の恐れがあるギフチョウの南限地とされる川上村で、10年以上、公式に生息確認がされていないことが、村の「森と水の源流館」の調査でわかった。桜の時期に舞う優雅な姿から「春の女神」とも呼ばれ、村内の希少生物として村もPRしてきた。すみかの里山が人口減で荒れてきたのが要因ともいわれ、同館の担当者は「地域の再生を含めた環境改善が必要だ」と訴える。(中井将一郎)

かつて多数のギフチョウが目撃されていた村内の裏山。「葉が小さいなあ」。幼虫の餌となるミヤコアオイの葉を見た館スタッフの古山晴さん(40)がつぶやいた。4月15日、葉に卵が産み付けられていないかを確認しに来たが、痕跡はなく、チョウの姿もなかった。「葉がシカに食べられて大きくなれないのかもしれない。山が荒れると、里山生物のギフチョウもすめなくなる」

同行した村源流ツアーズム推進室の佐藤充次長(53)も「舞っていれば、バードウォッチングと並ぶ観光資源になるが」と残念がった。古山さんによると、村内では1990年代には自然に生息していたという調査報告があったが、2000年以降はなく、公式確認

## ギフチョウ南限地・川上村

# 「春の女神」復活へ 里山守れ



⑤川上村で2007年頃に撮影されたギフチョウ。村内の確認事例としては最後の可能性がある(森と水の源流館提供) ⑥ミヤコアオイの葉を裏返してギフチョウの卵を探す古山さん(4月15日、川上村で)

## 荒廃要因か 10年以上未確認

としては07年頃に撮影されたのが最後という。古山さんは19、20年の4月にも、

た。

「突然、絶滅したとは考えにくいですが、生息しづらくなっているのでは。早急な対策が必要だ」。古山さんは同館や村、環境省、大学などの約20人と3月4日、オンラインを通じた意見交換を行い、保全の必要性を確認し合った。

ギフチョウは里山生物で、手入れされた明るい林に生息するという。古山さんは調査結果を説明し、近年は放置林が増えて森が暗くなり、シカの増殖でミヤ

ギフチョウ 黄色と黒の縦じまが特徴のアゲハチョウ科。羽を広げた大きさは約6センチと大型で、ソメイヨシノの開花期と同じ頃に羽化する。日本の固有種で本州のみに生息し、「生きた化石」とも言われ、環境省のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に分類。県内では御所市の葛城山で市の天然記念物に指定され、捕獲や幼虫の餌となるミヤコアオイの採取も禁止されている。

コアオイも食べられていると推測。「間伐などで森を手入れし、里山に人が戻って獣害を減らす、といった多方面の環境改善が大事だ」と訴えた。

研究者からは、大阪府などでもほとんど生息地が残っていないとの報告があった。参加した川上村井光の観音寺住職、沢野井嘉宏さん(74)は、村内で採取された卵を04年頃まで繁殖させていたと述べ、「飛ぶ姿が優雅できれいだった」と振り返った。

一方、村内のかつての生息地付近では、県外ナンバーの車が止まっているのが目撃されており、愛好家が採取しに来ている可能性もあるという。07年頃に最後に撮影した昆虫生態写真家の伊藤ふくおさん(74)(上牧町)は「環境が戻れば増えてくると思う。村の自然の素晴らしさを、まずは村の子どもたちにアピールできないか」と提案した。

古山さんは「人口減、森林の荒廃、獣害など、過疎地ならではの課題と深く絡んでおり、集落が元気になるには戻ってほしい。ギフチョウは地域活性化や自然保護のシンボルとして、村の大切な資源になれる」と強調した。

未来への風景づくり見本園の草を刈るボランティア  
＝5日、川上村白屋



大滝ダムの建設に伴い全戸移転した川上村白屋地区で5日、同村の環境学習施設「森と水の源流館」がボランティアの男女12人と一緒に草刈りや外来種駆除に汗を流した。

## 全戸移転の川上・白屋地区

# 古里の風景、未来へ

ボランティアら草刈り

# 外来種の駆除も

生態系を保護

おおたき龍神湖右岸の南向きの集落跡。建物はすべて撤去されたが、村が「未来への風景づくり」事業を始め、協力企業が植樹や管理に協力。環境学習にも役立てられている。

源流館は、同地区の自然生態調査を継続しており、人が住まなくなった場所の生態系の変化にも注目。

「人と自然のつながりを考えるきっかけに」とボランティアの輪を広げている。

この日はナキイナゴなど虫の鳴き声や季節の鳥アカシヨウビンのさえずりにも耳を傾けながら、鎌を使って作業。外来種はアフリカ・マダガスカル原産のナルトサワギク（キク科）やヨ

ロッパ原産のアメリカオニアザミ（キク科）を駆除した。

同地区出身の70代女性は「幼いころから家がなくなるとのあれこれがい出されます」と古里をいつくしみ「いろいろな人が関わって白屋を残してくれていることがうれしい」と話した。

# 駆除などに協力を

## サクラやモモに被害 県が注意呼び掛け

### 特定外来生物

## クビアカツヤカミキリ

サクラやウメ、モモなどに被害をもたらす特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」の活動が旺盛になる季節を迎え、県景観・自然環境課は同虫に関する情報を発信、姿を見つけた場合は駆除するなど県民に協力を呼び掛けている。

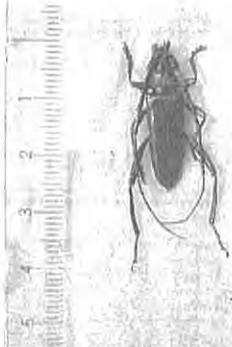
クビアカツヤカミキリは中国やベトナムが原産で、平成24年以降、国内各地でも生息が確認されるようになった。県内では令和元年6月に初めて成虫が見つかり、昨年は西和地域などで生息確認の報告が相次いだ。

クビアカツヤカミキリは内側から食い荒らして枯らせることもあり、平成30年に環境省が特定外来生物に指定した。成虫は体長2・5〜4センチほどで全体に光沢のある黒色をしているが、胸部が赤く、ややデコボコしているのが特徴。また幼虫が食い荒らした木からはフラスと呼ばれる、うどん状の木くずが大量に排出される。

県内では、昨年までに農業被害やサクラ並木などへの大規模な影響は確認されていないが、県景観・自然環境課は「大阪府や和歌山県では農業被害が出ている。隣接する県でも、対策の強化が必要」と指摘。防除では、幼虫の食害が見られる木の穴に薬剤を注入したり、成虫の移動を防ぐネットを巻き付けるなどの対策が取られるが、まずは発見することが大切。同課は「成虫を見つけた場合は踏みつぶすなど駆除するとともに、県や最寄りの市役所、町村役場に情報提供を」と呼び掛けている。

問い合わせは県景観・自然環境課、電話0742(27)8757。

クビアカツヤカミキリ(標本)。外来生物を取り上げた川上村の森と水の源流館の展示から川上村迫の同館



**要注意!** サクラの害虫 クビアカツヤカミキリ

奈良県内で、同虫の被害がクビアカツヤカミキリの被害が確認されています。クビアカツヤカミキリは、サクラ、ウメ、モモなどの木の内側を食い荒らし、樹を枯らしてしまうこともあります。被害を拡大させないために、成虫、フラス(幼虫の糞と木くずが混ざったもの)を見つけたら県内各自治体にお願いします。

— 成虫の特徴 —

- ・体長 2.5〜4cm
- ・産卵期は5月〜8月頃

クビアカツヤカミキリは、中国やベトナムが原産で、平成24年以降、国内各地でも生息が確認されるようになった。県内では令和元年6月に初めて成虫が見つかり、昨年は西和地域などで生息確認の報告が相次いだ。

クビアカツヤカミキリは内側から食い荒らして枯らせることもあり、平成30年に環境省が特定外来生物に指定した。成虫は体長2・5〜4センチほどで全体に光沢のある黒色をしているが、胸部が赤く、ややデコボコしているのが特徴。また幼虫が食い荒らした木からはフラスと呼ばれる、うどん状の木くずが大量に排出される。

クビアカツヤカミキリに注意を呼び掛ける県のチラシ



# シュロで棒たわし作り



シュロでたわしを作ったワークショップ  
=26日、川上村迫の森と水の源流館

川上に移住の北芝さん

植物のシュロを使った棒たわし作りのワークショップが26日、川上村迫の「森と水の源流館」であった。

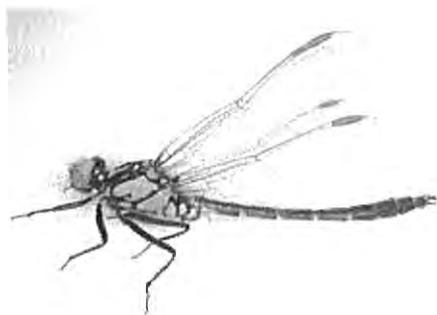
## 昔の人の知恵や 素材の力に感心

大阪から同村に移住し、仕事を生かした暮らしを探求している北芝美佳さん(51)が、自宅の庭で採取したシュロの皮を用いて作り方を指導した。毛先が柔らかく、ザルやすり鉢などの小物洗いにも便利だという。皮を数枚束ねてからハサミで大きさを形を整えて、

産経新聞 R3.7.28

## 希少種トンボ「コサナエ」 奈良市内で生息確認

2021年07月28日 産経新聞奈良支局 最新ニュース



奈良市内で生息が確認されたコサナエの雄  
(森と水の源流館提供)

県はこれまで下北山村でしか生息が確認されていなかった希少なトンボ「コサナエ」の新生息地が奈良市内に見つかったと発表した。コサナエは県の特定希少野生動植物に指定されており、県は今年度中に保護管理計画を策定し、来年度から事業を実施する予定という。

コサナエは山間部の池や休耕田などに生息する体長4センチ前後の小型のトンボで、成虫は5月下旬から6月中旬の短い時期にしか見ることができない。日本の特産種で北海道から本州に分布するが、近畿地方では生息域が限られている。県内ではこれまで下北山村の2カ所でしか生息が確認されておらず、里山の環境悪化などで減少が懸念されていた。

ところが今年5月、川上村の「森と水の源流館」職員の古山暁さんが奈良市内の山間でコサナエを発見。6月に県職員とともに現地確認を実施したところ、雄1頭が見つかり、新たな生息地が確認された。

古山さんは「10年近く探してようやく見つかった。紀伊半島でのコサナエの分布を読み解く上で重要な発見」とした上で、「今後の保護活動にも役立てたい」と話した。

約30分で完成。大淀町の新垂由美さん(53)は、「素材の力に気付くことができた」と感心した様子だった。実際に手作りしてみたら、昔の人の知恵や身近な素材の力に気付くことができた」と感心した様子だった。





# 川上村の外来生物紹介

## 森と水の源流館 昆虫や野草の標本で

川上村で採取された外来種の野草や昆虫を集めた企画展「川上村の外来生物」が、川上村の森と水の源流館で開かれている。標本などの紹介を通じて、吉野地域にまで外来種が侵入している現状がわかる。



①村内で発見されたムネアカハラビロカマキリ(左)。卵が産み付けられた輸入竹ぼうきを介して侵入したと考えられている②オオキンケイギク(手前)など、村内で採取された特定外来生物の標本(川上村で)



展示する7種の標本のうち、在来の昆虫を食べ尽くす恐れがあるというムネアカハラビロカマキリは、3年前に村内で初めて採取された。中国から輸入された竹ぼうきに産み付けられていた卵が元とされており、竹ぼうきのミニチュアを並べた。

このほかにも、在来の野草を駆逐するため特定外来生物に指定されているオオキンケイギクなど、村内の自然の草原に生えていた野草の標本もある。身近に定着している外来種もパネルで解説している。シュロは平安時代に中国から、日本庭園などでも見られるニワセキシヨウは明治時代に北米から、もたらされた。吉野杉が特産の

◆読売新聞オンライン  
読者会員登録で大阪本社版朝刊の各地域版がカラーでご覧いただけます

地だが、スギは元々、三輪山や春日山から持ち込まれたとされ、「村には自生していなかった外来種と考えたい」とする。一方、サルやシカなど農地や森林への被害で問題になっている

在来種の動物もいる。企画した館職員の木村全邦さん(48)は「外来種が悪という単純な話ではなく、人間との関係で悪者になることもある。生き物との関係の大切さを見つめ直すきっかけになれば」と話す。

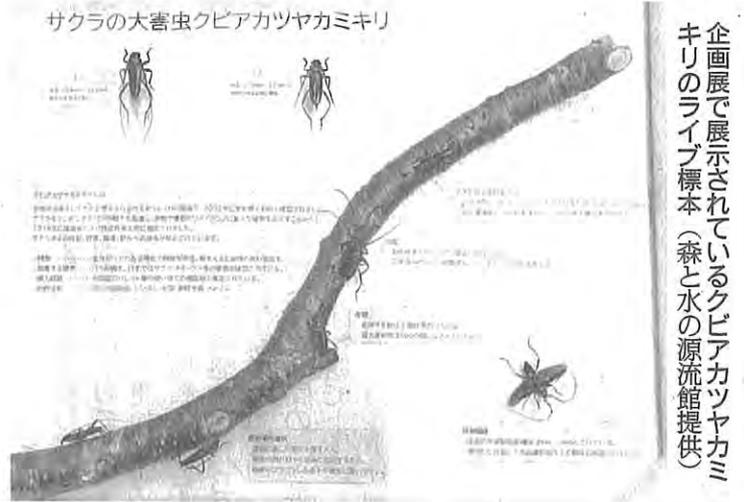
31日まで。水曜休館。入館料は一般400円、小学生200円。問い合わせは源流館(0746・52・0888)。

# 川上村の外来生物を知ろう

## 森と水の源流館で企画展

川上村で確認されている外来生物を写真や標本で紹介する企画展「川上村の外来生物」が、森と水の源流館（同村）で開かれている。人と自然の関わり方を考えるきっかけにでもらおつと企画された。31日まで。

平成30年に県内で初確認



企画展で展示されているクビアカツヤカミキリのライブ標本（森と水の源流館提供）

る。

同館職員の古山暁さんは「外来生物を知って正しく理解するとともに、自然と人間の関わりについて考えてほしい」と話している。

入館料は小中学生200円、高校生以上400円。問い合わせは同館（0746・52・0888）。

# 昆虫標本作り コツ伝授

## オンライン教室に12家族



オンラインで子どもたちに昆虫標本の作り方を教える古山さん

昆虫標本を作るオンラインの教室を22日、川上村の森と水の源流館が開き、県内のほか大阪や東京の小学生ら12家族が参加した。

同館では、夏休み期間に子ども対象の自然教室を催しており、コロナ禍の中、初めて企画。参加者には事

前にも、標本にするカブトムシの雄や道具を送付した。昆虫に詳しい館職員の古山暁さん（40）が講師を務め、パソコン越しに「カブトムシは幼虫の時に食べる落ち葉の量で大きさが変わる」などと説明。胴体や脚を針で固定する様子を見せ、「脚が開きすぎない方がかつこいい」「左右の形をそろえよう」とコツを伝えた。

「標本で大事なものは、捕まえた場所と時間を書いたラベルを貼ること。思い出を形に残すこともできる」と話すと、参加した家族から「旅行に行つて作ろうね」との声が聞かれた。

古山さんは「対面とオンラインを組み合わせると、場所にかかわらず参加してもらえそう」と話していた。

# 吉野林業を学んで

## 一 林業関係者や 般消費者 課題共有や意見交換

### 「森と水の源流館」オンラインで勉強会

川上村の原生林を守る活動が続ける「森と水の源流館」が9月25日、「源流の森づくり特別編～吉野林業の今を学ぼう」と題した勉強会をオンラインで開いた。県内外の林業関係者や工務店、一般消費者らをつなぎ、吉野林業の課題について認識を共有した。



オンライン勉強会で発表する20歳の林業従事者、オノ岩さん(右)=9月25日、川上村迫の森と水の源流館

吉野川源流の同村は森林率95%で、うち約7割が人工林だ。吉野林業繁栄の地で、造林事業は室町時代に始まったとされる。約400年もの間、植栽や間伐が続けられてきた人工林も残る。勉強会では、一般社団法人「吉野かわかみ社中」の上田二仁参与と、山林所有者の若手、谷茂則・谷林業代表が、吉野林業の実情を

報告。吉野かわかみ社中は村行政と村内林業4団体が6年前に設立した。30年以上にわたって低迷する林業だが、谷さんは幅広いネットワークを生かして都市部の需要に対応できる体制づくりを推進。所有する人工林では生産増を可能にする作業道の開設にも力を入れている。経営、技術ともに次世代への継承が差し迫った課題

で、意見交換には大和森林管理協会(王寺町)の職員で同村内で作業道づくりを学ぶ20歳の平岩直人さんが登場。「経営意識も芽生えた。責任感を持って従事したい」と意欲を見せた。勉強会は源流館職員で植物分類学が専門の木村幸邦さんが「地域の文化も独自の豊かな生態系も、基幹産業である林業の営みと連携しないと守っていけない」

と企画。「持続可能な地域づくりを目指し、まずはいろいろな人と認識を共有し、一歩ずつ進めれば」と模索する。住居に吉野スギを使用した一般消費者や工務店も参加し、「実感した吉野材の良さをSNSに発信したい」「木材需要はあると思う」と感想を述べた。里山保全団体のメンバーは「スケールの大きなテーマだが、ともに考えなければいけない」と話した。

# 博報賞 奨励賞 平城小が受賞

博報堂教育財団（東京都、戸田裕一理事長）の「第52回博報賞奨励賞」に、奈良市立平城小学校（同市秋篠町、小倉康裕校長）の「学校から地域を巻き込みSDGs（持続可能な開発目標）の達成に貢献するE S D（持続可能な開発のための教育）の実践開発」が選ばれた。



世界遺産学習全国サミットでの発表  
奈良教育大学（同校提供）

## 環境保護へE S D実践開発

令和元（2019）年度に4年生が中心となり、地域を流れる秋篠川のプラスチック汚染問題の解決を目的に、大人を巻き込んだ取り組み。自分たちだけでなく、地域の大人も変わることを目指し、「総合的な学習の時間」を使って実施した。

同年度に奈良教育大で開かれた「第10回世界遺産学習全国サミットinなら」で同児童らが発表を行った。

### ゴミ問題、大人を巻き込み

同財団は児童教育現場の活性化と支援を目的に設立。学校・団体・教育実践者らの「波及効果が期待できる草の根的な活動と貢献」を顕彰、活動の継続と拡大の支援を行っている。

審査講評では「子どもが地域の学習材を対象に、十分な体験活動を土台にして、粘り強く探求している。それを支える指導体制や組織が整備されている」と評価された。

当時4年生の担任で、中心となって指導し、児童と共に活動した新宮清教



ための看板設置（同）

諭（34）は「子どもたちは河川のゴミを拾って分析し、大人にゴミについて一緒に考えるよう訴えた。地域のみんなが変わろうと働きかけるところがすごい」と話した。

また小倉校長は「子どもたちが、地域のことを考え、環境保護について考え実践し、故郷を忘れない大人に育てほしい」と述べた。

同賞の贈呈式は12日に、人数制限をした対面とオンラインの両方で行われた。

トヨタ社会貢献  
事業で従業員ら

# 外来植物探し駆除

## 川上・白屋地区 生態系保護へ

全国各地で環境活動を展開するトヨタ自動車の社会貢献事業「トヨタソーシャルフェス2021」が28日、川上村の白屋地区であり、一般参加の家族連れや系列販売店従業員、村関係者ら計45人が外来植物の駆除などを行った。

白屋地区は大滝ダム建設に伴う地すべりの影響で人が居住できなくなった地域。宅地跡は、協力企業・団体と村が草刈りや景観の

保持に努めているが、日常生活が営まれないことで生態系が崩れ、繁殖力の強い外来植物が目立つようになっている。

同村の環境教育施設「森と水の源流館」の職員が白屋地区の歴史や現状と課題、村内で観察できる動植物などについて説明した後、環境省が積極的な防除を呼び掛けている外来植物のナルトサワギクを探し歩いて引き抜いた。

動植物のことなどを教わった。ナルトサワギクはたくさんあり、頑張って引き抜きました」と話した。

また、奈良教育大学の有志学生も参加。同大2年、木村直希さん(20)らは地球環境の未来のために、今できることを少しずつ、子どもたちも一緒に行動する取り組みの大切さを実感したと話した。



ナルトサワギクは直徑2センチほどの黄色い花がほぼ一年中開花し、綿毛を飛ばして広がる。葉はアルカロイドを含み、草食動物などに有害。自然豊かな同村が大好きという生駒市の小学2年中背愛莉さん(8)は「有毒な

村裏沿いのナルトサワギクを引き抜いて駆除する参加者。28日、川上村白屋

# 事業の意義、継続を再確認

水源地・川上村—大和平野土地改良区



水のつながりプロジェクト

## 橿原で10周年記念式典

吉野川の水源地・川上村と吉野川分水受益者の大和

平野土地改良区が平成24年から続けてきた「水のつながりプロジェクト」の10周年記念式典が17日、橿原市

交流水田のワラでしめ縄をなう児童—17日、橿原市城殿町の大和平野土地改良区

城殿町の大和平野土地改良区であり、事業の意義と継続を再確認した。

紀伊半島大水害が発生した平成23年、大和平野土地改良区の組合員が、吉野川分水で育てた米を「おかげ米」として川上村に届け、水の恵みや水源地を守る村の取り組みに感謝したのが始まり。橿原市田中町の農家団体の協力を得て、同市と川上村の小学生らが毎年、交流水田で田植えや稲刈りを体験している。

式典で、大和平野土地改良区の金沢秀樹理事長は「10年前の思いが子どもたちを引き継がれている。水源地と受益地域が一体とな

って清流を守って行くことを誓う」とあいさつ。

栗山忠昭・川上村長は「皆さんが水のつながりが人のつながりであることを実践してくれている」と喜んだ。来賓の亀田忠彦橿原市長は「つながりをもっと深めたい」と話した。

橿原市立香久山小学校と川上村立川上小学校の5年生が参加。同市田中町水土里の会（吉田宗義会長、13人）から、今年の「おかげ米」を受け取った児童は「おいしいお米を育ててくださり、ありがとうございます。感謝の気持ちで食べたい」と重みを実感していた。水をテーマにした歌の生演奏やしめ縄づくりの講習会もともに楽しんだ。

# コケ 観察して

## 5日にオンライン講座 川上の森と水の源流館

### 生態、豆知識紹介へ

職員の  
木村さん



「ほら、コケはどこにでも生えてますよ。きれいでしょ」とかがみこんで示す木村さん＝川上村の森と水の源流館

川上村の環境教育施設「森と水の源流館」は3月5日午後1時半から、オンライン講座「コケをしらべよう」を開催する。参加には事前申し込みが必要。先着50人。無料。

コケの専門家と同館職員

例年は木村さんのガイドの木村全邦さん(49)と本藓苔(せんたい)類学会役員IIが村内で撮影したコケを紹介しながら、コケ類の生態や豆知識を分かりやすく解説。参加者の質問にも答える。

でコケを探して歩く少人数のツアー形式が人気だが、新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、初めてオンラインで行う。

木村さんは「足下でひっそり生きていて見過ごされることが多いが、クローズアップすると存在感があり、びっくり箱みたい」とコケの魅力を語る。最近はおしゃれなインテリアにもなっている。

「永遠」の象徴で、その生態を学ぶと無限の生命力の秘密がわかるという。

今回のフィールドは、万葉歌にも登場する青根ヶ峰のふもと。同村西河の蜻蛉

の滝周辺で、木村さんの調査では、葉っぱに着生するカビコケ(準絶滅危惧種)など約140種が確認されている。

講座は小学生以上が対象。「もふもふ」などと表現されるコケの手触りなどは伝えきれないが、資料や写真を交えたオンラインならではの内容だ。木村さんは「コケはすぐに見つけれないので、生態を学んで観察してみたい」と話している。

講座はビデオ会議システム「Zoom(ズーム)」を利用。源流館のメール(Email: [orinizu@gentyu.or.jp](mailto:orinizu@gentyu.or.jp))に名前と「蜻蛉の滝のコケをしらべよう」のオンライン参加希望を明記して送ると、前日までにミーティングIDとパスコードがメールで届く。

問い合わせは森と水の源

流館、電話0746(52)00000。

## 学校から地域を巻き込みSDGsの達成に貢献する ESDの実践開発

(独創性と先駆性を兼ね備えた教育活動)

2016年から、学校の横を流れる秋篠川の課題解決への取り組み(4年生)を核に、ESDを推進している。活動はもとより授業開発や研修も、吉野川源流に位置する「森と水の源流館」、近畿地方ESD活動支援センター、環境省近畿事務所などと連携して行われ、安定的・持続的な活動となる体制・仕組みを整えている。

川に対する子どもたちの関心を高め、自ら学びたいようになるように開発されたカリキュラムは、生物調査や水の冷たさを感じるなど自然との交歓の体験からスタート。「森と水の源流館」館長のレクチャーや、農家・漁師・昔の川を知る高齢者への聞き取りなどを通して、川の役割について探究的な学びを深めていく。活動を通して川の恵みを知り、親しみを育んだ子どもたちの前にやがて立ちはたかるのが、川のプラスチック汚染の課題だ。子どもたちはゴミマップを制作し、汚染の現状を可視化。現実を直視し、「自分は何ができるのか」を問う中で、やがてプラスチック製品を極力使わない、使ってもリサイクル



子どもだけが行動を変えてもこみか無くならないことを知る

する」といった考えに至る。

さらに根本的な課題解決には、大人を動かすことが不可欠であるとの気づきを得て、世界遺産学習全国サミットなどを介して、課題を発信。河川環境保全を行う団体が子どもと共に活動を開始するなど、地域を巻き込んだ活動へと発展している。



子どもたちの要請に大人が応え、一緒に看板を立てて発信

### 調査委員より

学習指導要領が改訂され、新たに前文が位置づけられた。そこには「持続可能な社会の創り手」ということが示され、これからの社会に求められる人材像が明らかにされている。平城小学校の実践は、そうした未来社会を担う子どもに確かな資質・能力を育成しようとする取り組みである。総合的な学習の時間を通して、子どもが地域の学習材を対象に、十分な体験活動を土台にして、粘り強く探究している姿が印象的である。また、それを支える指導体制や組織が整備され、学校外との連携が安定的に行える状態を整えようとしている。

### 「博報賞」について

「博報賞」は、児童教育現場の活性化と支援を目的として、財団創立とともにつくられました。「ことばの力を育むことと、子どもたちの成長に寄与したい」という強い意志を核として、日々教育現場で尽力されている学校・団体・教育実践者の「波及効果」が期待できる革新的な活動と貢献の軌跡を顕彰していきます。また、その成果の共有、地道な活動の継続と拡大の支援も行なっています。

国語教育 特別支援教育

日本語教育

日本文化・ふるさと共創教育

国際文化・多文化共生教育 など

### 第53回「博報賞」概要

2022年4月1日(金)～6月30日(木)

正賞：賞状 副賞：博報賞100万円 功労賞50万円 奨励賞30万円  
【各賞】 文部科学省

◆受賞希望者へ：2022年10月10日(月)まで、日本工業倶楽部(東京都千代田区)

◆応募式：2022年11月13日(金) 於 日本工業倶楽部(東京都千代田区)

◆第53回の詳細については、HPをご覧ください。

博報賞問い合わせ先

hakuhouhou@hakuhou.co.jp

「子ども・ことば・教育」を活動領域に様々な支援を行っています。

- 児童教育実践についての研究助成
- 教育実践研究基金
- 海外の研究者の日本招待
- 世界の子どもたちの日本語交流
- 社会啓蒙事業(子どもたちの読書機会拡大)
- こども研究所

公益財団法人 博報堂教育財団

〒100-0011 東京都千代田区外神田2丁目2-3 日比谷国際ビル14階  
TEL:03-6206-6266 (平日9:30~17:30)

# 「源流館」リニューアル

来月1日  
オープン  
学び支援、ESD推進

川上村の環境学習施設「森と水の源流館」が4月1日、リニューアルオープンする。水や森の恵みを大きなテーマにさまざまな学びをサポート。ESD(持続可能な未来をつくる担い手を育成する教育)を推進し、小学生のための授業つ

くりにも対応する。29日、ESD関係者向けの内覧会が開かれた。

コロナ禍で触れる展示を控え、当面は図書コーナーも閉架するが、学びを導くキーワードを散りばめた幅4段の大きなパネルなどを制作。オンライン学習の広

がりも背景に公衆WiFiを整備し、パソコンと接続できるモニターも設置した。換気窓などの感染症対策も徹底した。

玄関を入るとまず、美しい吉野スキのシート壁と印字された「川上宣言」(平成8年)が目飛び込む。

さまざまなキーワードや図像で興味関心を深めるパネルが設置された館内。29日、川上村宮の平の森と水の源流館



林業の歴史の紹介をリニューアル。昆虫コーナーも充

水と森を守る村民の決意を表現している。

実し、身近な自然の豊かさや尊さに気付く。「トンボの目」や「バッタのシャンプ」などの昆虫動画は館内のQRコードを読み取ってタブレットなどで見ることが出来る。

床にペイントされた吉野川の流れをたどりながら川の生きものや水のつながりを発見していく。縄文以降の人々の暮らしや

村が保全する天然林の映像とシオラマの「源流の森シアター」や川魚が泳ぐ水槽はこれまで通り。円形構造の3階建てで見学時間は1時間から1時間30分程度。

入館料は高校生以上400円、小中学生200円。有料の環境学習プログラムあり。午前9時〜午後5時。水曜休み。問い合わせは同館、電話0746(52)08888。



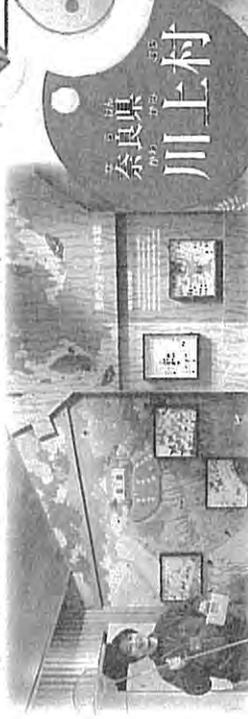
上・中・下流のちがいを解説

新しくなった  
楽しくなった

# 森と水の源流館

行ってみよう!

みんなは、行ったことがあるかな？  
吉野川(紀の川)がはじまる川上村に20年前からあった森と水の源流館が、このたび一部新しくなつて再オープンします。森や木のこと、さまざまな生き物のこと、水のことながりのことなどが、これまで以上に楽しく、わかりやすく学習できるようになりました。何年生になつても、まことまた新しい発見に出会えます。初めての人も何回目かの人も来てみてね！



奈良県 川上村

川上村の森の歴史を紹介  
今の川上村の森になるまで、どんなドラマがあつたのしょうか？人と森の関係がわかる縄文時代以降をわかりやすくまとめました。鍵となつた吉野の林業の昔の水を運ぶ方法、修羅木馬、筏流しの様子をジオラマで再現しました。

館内でできる昆虫観察  
毒針を持つスズメバチは、狂暴なイメージですが、増えすぎた昆虫を調整する仕事をしています。昆虫は体を専門道具のように変化させたプロフェッショナルと言え、仕事がしやすい場所で暮らしています。昆虫の役割や住む場所の意味のヒントをパネルや標本箱に隠しました。さがしてください。

ほかにも、いっぱい!

入館料 / 一般 ..... 400円 (300円)  
小・中学生 ..... 200円 (150円)  
※小学生未満は無料 ( ) : 25名以上団体割引  
※学校教育機関での利用は小中とも1人100円  
<http://www.genryuu.or.jp>

〒639-3553 奈良県吉野郡川上村宮の平  
電話 0746-52-0888  
開館時間 / 9:00~17:00 (入館受付は16:30まで)  
休館日 / 毎週水曜 (祝日の場合は翌平日)

「ありがとう」は  
だれの言葉だろう?

下海にきれいな水を探すと  
どうなるの?





公益財団法人 吉野川紀の川源流物語

〒639-3553 奈良県吉野郡川上村宮の平

電話 0746-52-0888 FAX0746-52-0388

<http://www.genryuu.or.jp> e-mail: [morimizu@genryuu.or.jp](mailto:morimizu@genryuu.or.jp)